発掘だより No.8　1987.8.30.発行

昭和62年度三河国分寺跡発掘調査の概要

昭和60年度から始まった国史跡三河国分寺跡の発掘調査も、今年で三年目を迎えました。今年度は、塔跡・講堂跡・北面及び南面の築地跡の確認を目的として調査を行っており、現在までに様々な成果が得られています。

1. 各トレンチ（発掘区）の調査概要

(1) 寺域北限（Sトレンチ及びXトレンチ）

昨年のLトレンチの調査により北面築地跡と想定される遺構が検出されたために、その延長線上にSTおよびXTを設定しましたが、残念ながら北面築地の痕跡は、どちらからも確認されていません。

ただし、Sトレンチでは、東面築地内側の溝の延長とも推定される溝状遺構が検出されており、また、7ケ所で柱穴も確認されています。門等の施設を考えることもできますが、その性格については、まだはっきりしたことは言えません。

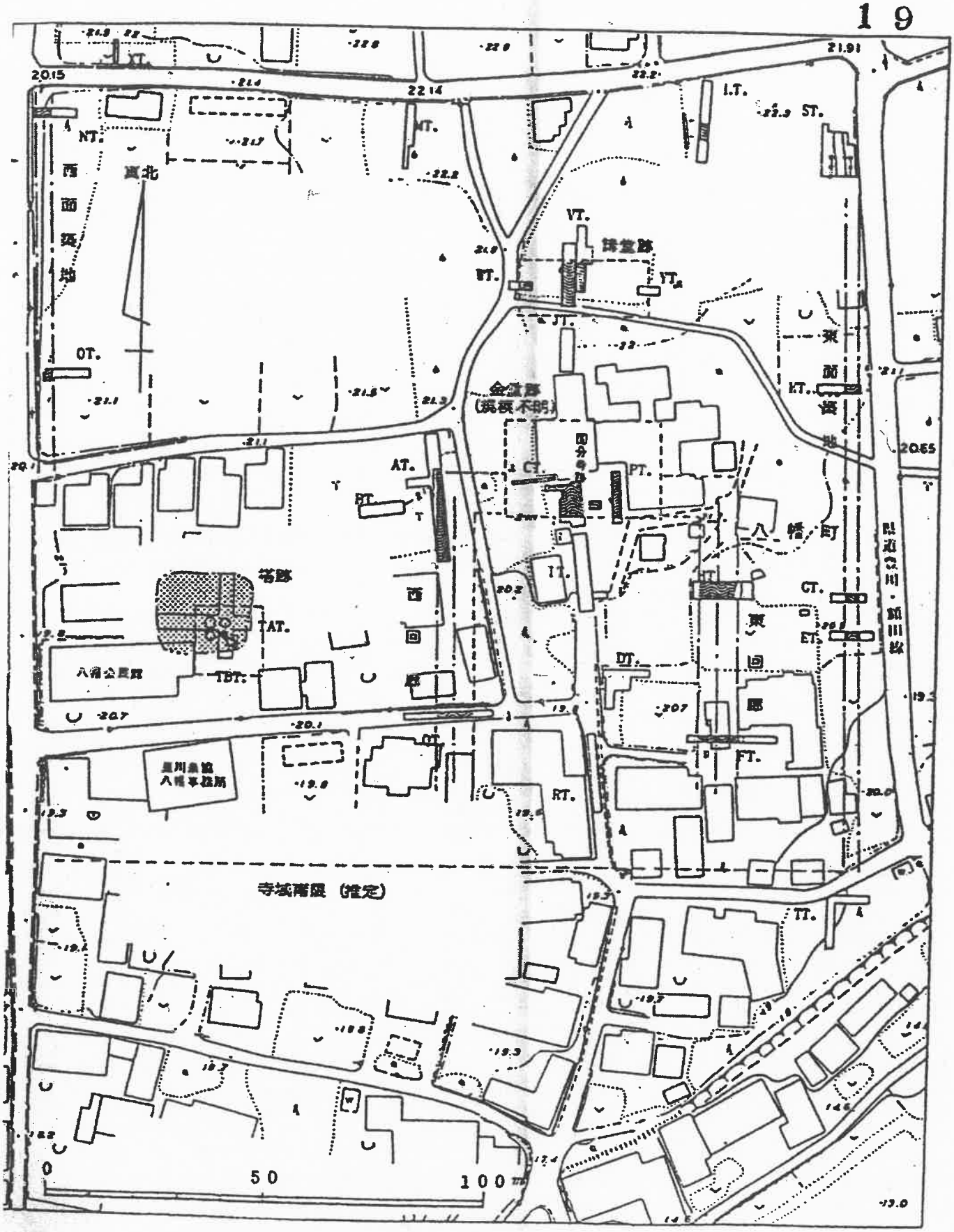
(2) 寺域南限（Tトレンチ）

国分寺跡指定域南東隅の竹ヤブ内に、逆L字状にTトレンチを設定しました。ここは東面築地の延長線上に当るわけですが、築地跡が確認出来なかったため、寺域南限はトレンチよりやや北側に位置すると推定されます。中世以降の深い溝やピット（小穴）検出されています。

(3) 講堂跡（V．W．Yトレンチ）

昨年、現国分寺本堂裏のJトレンチで、講堂跡に比定されうる建物跡の基壇（版築(はんちく)と呼ばれる縞状(しまじょう)の土の堆積が存在した）が確認されたので、今年度は、その規模を確認するために、3ケ所にトレンチを設定しました。

VトレンチとWトレンチでは、基壇端を一応確認していますが、後世の攪乱で基壇を若干削っている可能性が考えられ、雨落ち溝・基壇化粧等の痕跡は確認されていません。現状では、東西約30m、南北10数mの規模を想定していますが、まだ不明確な点が多いと言えます。なお基壇構築前の掘立柱建物跡（東西3間以上、南北2間以上）が検出されています。



三河国分寺跡

今年度調査のトレンチ　：　ST.～YT.&塔跡TAT・TBT

４．塔跡　（ＴＡトレンチ及びＴＢトレンチ）

塔跡は、三河国分寺の伽藍の中で、基壇と礎石が地表面で確認される唯一の遺構であり、今回の調査では最も期待のかけられた場所です。塔基壇の位置と規模を確認するために、幅３ｍを基本としたトレンチを十字に設定しました。

(1)　礎石（そせき）・根石（ねいし）

塔では、通常１７個の礎石を必要とするわけですが、現在、三河国分寺塔跡には２個の礎石しか残っていません。また、そのうちの一つは、隣の穴から大正時代に抜かれており、原位置を保つ礎石は、わずかに一つのみです。

ただし、発掘調査を行うと、礎石自体が抜かれていても、その礎石を据えるための根石が確認されることが多く、礎石が存在しなくても、礎石のおよその位置を推定できます。

(2)　塔基壇（とうきだん）の位置と規模

今回の調査では、３か所で根石が確認されました。そのうちの１か所（現存する礎石の東南側）は、位置からみて心礎（しんそ）の根石と推定されます。また、北側と西側のトレンチでは、基壇端と考えられる段差が確認されています。これらの事実から、塔基壇の位置としては、現段階では、右側の図面の破線で囲んだ範囲が想定されます。

なお、塔の基壇の規模は、心礎推定位置から基壇端までが約８ｍを測るため、一辺長１６ｍ前後の大きさと推定されます。

(3)　版築（はんちく）

塔や金堂などの大きな瓦葺き建物を建てるためには、しっかりとした基礎（基壇）を造る必要があります。このため、基壇を構築する際に、版築といった技法を用います。これは、厚さ５㎝程度の土を積んではつき固め、また別の土を積んではつき固めるもので、断面を観察すると、ちょうど横に流れる縞模様のように見えます。公民館裏の塔基壇を削った面で、この版築の様子が観察できます。

(4)　中世土塁（どるい）

塔の基壇は、土塁を接続することにより、中世末に二次利用されています。戦国時代には、この辺りに八幡砦（とりで）が存在したことが文献に見られるため、塔跡がこの砦の一部として利用されていた可能性が非常に高いと言えます。

土塁は、寺域内の他の場所にも存在しており、三河国分寺跡は、中世の遺跡としても貴重な遺跡と言えます。

東北

土塁

←工塁（戦国時代）→

礎石（ナラ材）

礎石

礎石

礎石

礎石

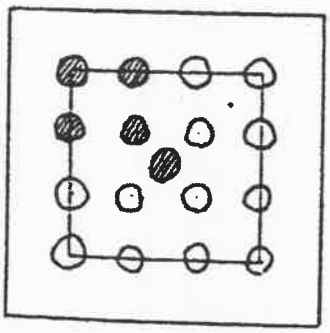
根石（心礎）

塀基壇

八幡公民館

0　5　10m

駐車場



≪塀の礎石の位置模式図≫

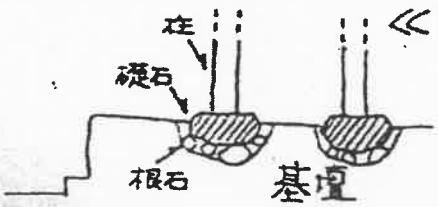
計17個の礎石を必要とします。

・中心の礎石を心礎（しんそ）と言います。その柱は心柱（しんばしら）。

・そのまわりの4本の柱を四天柱と言います。

・周囲の12本の柱を側柱（がわばしら）と言います。

※ ●は今回の調査で確認されたもの



≪礎石と根石　模式図≫

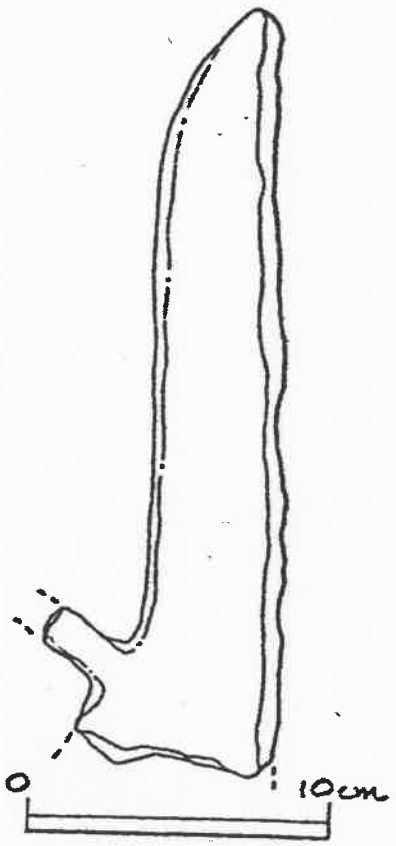
柱の下には、柱を支える礎石が必要とされます。
その礎石を固定させるのが根石です。

２．出土遺物

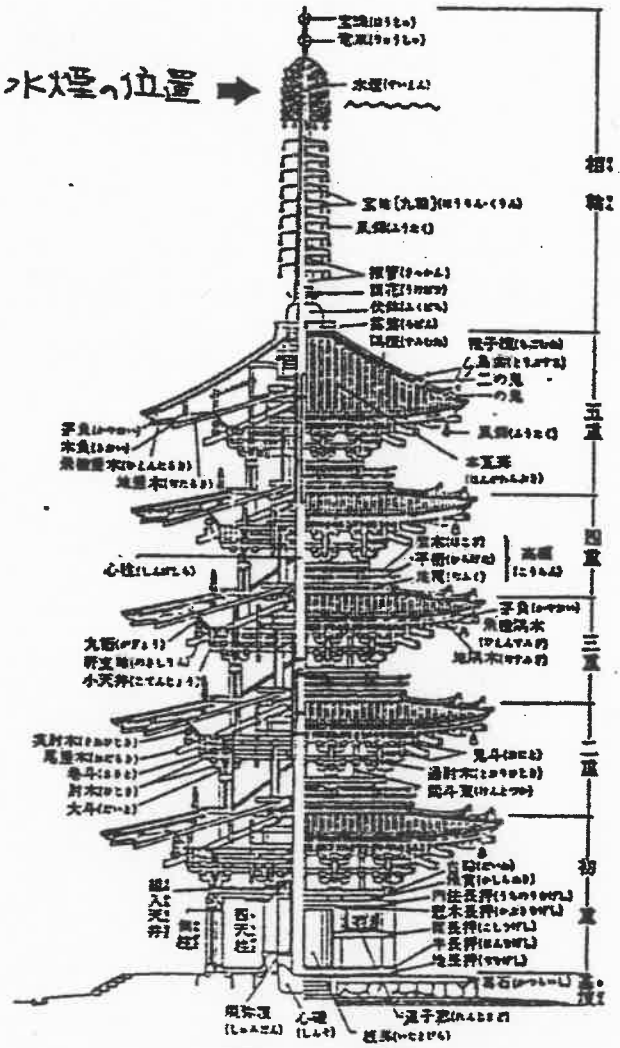
１．水煙（すいえん）破片

塔跡西側の黄褐色土層中から、塔上部につけられる水煙の破片と推定される銅製品が出土しています。長さ（残存長）２５cm，厚さ１cm程の大きさで、非常に重量感があります。水煙は、完全な形で残っていれば１mを越えるような大きさであり、今回出土した破片は、そのごく一部にすぎませんが、このような遺物が出土したことにより、塔跡の位置づけも間違いないものと思われます。

※　水煙等の塔の相輪部分が発見されることは全国的にみても珍しく、今回これだけの狭い面積の調査で、水煙の破片が出土したことは貴重な発見だといえます。



塔跡出土水煙破片



醍醐寺五重塔（参考）

２．土器

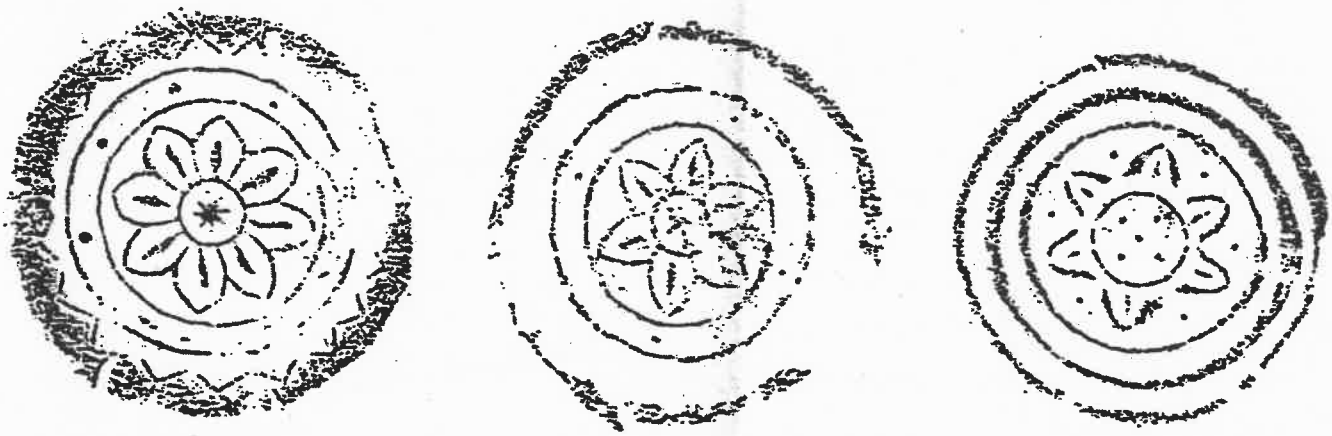
今回の調査では、国分寺の時期（奈良～平安時代）に遡る土器は、少量しか出土していません。塔跡や講堂跡を中心とした調査ですので当然のことと言えます。Ｓトレンチでは、平安時代の須恵器（すえき）・灰釉陶器（はいゆうとうき）などが、ややまとまって出土しています。

３．瓦・塼（せん）

塔跡では膨大な量の瓦や塼（瓦質のレンガのような物）が出土しています。瓦には軒丸瓦や軒平瓦も多く見られ、様々な種類の文様があることがわかっています。

創建瓦と推定されるのは左端の瓦であり、三年間にわたる調査を通じて最も多く出土しています。

※　軒丸瓦・軒平瓦　ともに１０種類程度に分類できます。ここに載せたものはその一部です。



（創建瓦）

単弁蓮花文軒丸瓦（八葉と六葉）

均整唐草文軒平瓦
（創建瓦）

飛雲文軒平瓦